The Journal of Kamakura Women's University, Vol.28, pp.25-34, January 2021

原著論文

保育所における階上テラス型園庭の使用方法の実態と管理運営上の課題

幸喜　健（初等教育学科）・細川　かおり（千葉大学教育学部）
岡野　雅子（東京福祉大学保育児童学部）・早川　悦子（元鶴見大学短期大学部）

Actual Usage and Management Issues of Terrace-type Playground in Nursery Schools

Ken Koki[1], Kaori Hosokawa[2], Masako Okano[3] and Etsuko Hayakawa[4]
[1]Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College
[2]Faculty of Education, Chiba University
[3]Faculty of Childcare, Tokyo University and Graduate School of Social Welfare
[4]Tsurumi Junior College

Abstract

In recent years, due to the urgency of resolving waiting lists for children in urban areas in Japan, the expansion of childcare facilities has been attempted amid increasing deregulation. In this study, we examine the issues related to a new kind of nursery school including a terrace-type playground, which differs from the earthy playgrounds of conventional nursery schools, by interviewing nursery school directors. The results make it evident that nursery schools with terrace-type playgrounds comprise usage restrictions in complex facilities. Further, an awareness of problems related to children's natural experiences arises as well. Therefore, it is necessary to consider curricula and childcare contents based on nursery school enviroments' features.

Key words: terrace-type playground, nursery school, childcare
キーワード：階上テラス型園庭、保育所、保育

Ⅰ．問題の所在と目的

近年、共稼ぎ世帯の増加、核家族化や地域関係の希薄化などといった社会構造の変化に伴って保育サービスの利用を希望する保護者が漸増している。特に都市部においては保育施設の入所希望者が定員を上回り、保育所の不足によって保護者が子どもを「預けたくても預けられない」といった事態が生じ、“保活”なる言葉も新たに生み出されるほど「待機児童」が問題化している。そのため、待機児童の解消が喫緊の課題となっており、保育施設の量的確保が急務とされている。しかし、都市部においては新たな保育施設のための用地取

得が困難なことから量的拡充は容易でなく、地域の実情に応じた弾力的な保育所基準の運用を図るため、これまでに設置基準の緩和がなされてきた。特に2001（平成13）年3月には、待機児童の多い地域では園庭を付近にある広場や公園（駅ビル等の保育所は屋上）で代用可能とされ、そうした特例措置がとられた結果、従来の園庭を備えた保育所とは異なる多様な形態の保育所が設置されるようになってきている。

筆者が関わっていた保育所は園舎がビルの階上にあって接地性がなく、従来の園庭の代替としてテラスを持つ園であった。テラスは相応の広さがあり、日当たりも良かった。当初筆者は特に気にとめなかったが、その園の保育者からはしばしば保育をする際の使い勝手の悪さが聞かれた。保育室からすぐに園庭にでられないクラスがあったり、フェンスを越えて落下する危険を考えるとボール遊びに制限をつけざるを得なかったりしているという話であった。そのような声を聞いて改めて見回すと確かに訴えにあるような側面が見受けられ、階上のテラス型の園庭をもつというこの園は、従来型の土の園庭とそれに面した園舎をもつ園とはその環境に異なる特徴を持っているのではないかと感じるようになった。保育は長い歴史がある営みであるが、これまでは土の園庭があり、その園庭に面した園舎がある保育園が一般的であり、こうした園を念頭に保育が行われ、保育の実践の知見が積み重ねられてきたと考えられる。もちろん階上のテラス型の園庭をもつ園が、従来型の園と全て異なるわけではないが、異なった特徴をもち、それが保育者の受ける“使いにくさ”という印象につながっているのではないかと考えた。もし階上のテラス型の園庭という環境が従来型の環境の園とは異なる特徴を持つのであれば、従来型の保育とは多かれ少なかれ異なった方法や異なった配慮が必要となるのではないかと考えられる。

さて、こうした従来とは異なる建築の園はどれくらい存在するのであろうか。小池・定行（2006）は、東京都特別区の認可保育園についてアンケート調査を行い、278施設から回答を得たが、このうち43.4％が他の施設（住宅、子どもの施設、高齢者施設など）と複合していた。保育所の設置階は、1階または1～2階に設置されている園が96.1％と多く、1階に保育室がない（接地性のない園）は2.5％であったとしている。複合型認可保育園の96.8％に占有する園庭があり、このうち園庭の場所は90.6％が地盤面であり、ベランダ・屋上は7.0％であったとしている。現在は、接地性がない園が小池らの調査より多くなっているのではないかと推測される。

また小池・近藤・定行（2015）は、複合施設と一緒のビルに設置されている保育所の環境について検討している。全国の認可保育所を対象に、施設環境を明らかにし、空間や設備において改善が望まれる点について調査した。全国の1728園（42.2％）から回答を得た。保育所の設置形態は87.6％が単独施設となっているが、東京都および政令指定都市に限ってみると77.9％となっており、残りは住居や他の施設等との複合型の建物に保育所があったとしている。東京都および政令指定都市のような都市部においては、接地性のある園も含めて、複合施設と一緒にビルに設置されている割合が多い傾向にあるといえる。

こうした環境は、保育にどのような影響を及ぼしているのであろうか。定行・小池（2007）は、子どもにとっての保育環境という点から、施設環境の現状と保育施設の形態が及ぼす影響について検討している。近年の首都圏の保育を取り巻く環境をみると、様々な施設環境の中で保育が行われているとし、この中で園庭を持たずに近隣の公園等を外遊びに利用しているケースもあるが、「近隣の公園については子どもの遊びにふさわしい環境が確保されているか不明確である」との問題意識をもち、園庭や周辺環境で子どもの外遊びについての調査を行った。ヒアリングと参与観察によって8園を調査したところ、多くが周辺施設を利用しての外遊び・園外散歩を楽しみ、園庭では行うことのできない行為の補助的な利用をしていた。また、公園は遊びの種類が限られ、園庭で見られる遊びのほうが遊びの種類が多く見られたとし、「園庭の有無や保育施設の立地・周辺施設の環境によって外遊びの時間や遊びの種類が大きく変わっ

てくる」とした。小池や定行は建築学の視点から研究しているが、こうした従来と異なる保育所の環境が保育にどのような影響を及ぼしているのかといった視点での研究は少ない。

また、小池・定行（2008）、三輪・田中・松橋・谷口・田村（2008）、野中（2014）など、近隣公園施設等を園庭の代替あるいは補助として活用している保育施設の研究は複数存在するが、階上テラス型園庭という環境そのものを扱った研究はない。

保育は環境を通して行うものとされており、保育における環境の重要さについてはいうまでもない。そこで筆者らはビルの2階以上に設置され、接地性がなく、階上テラス型園庭を持つ保育所を対象として調査を行い、園庭の物理的環境が子どもの遊びに及ぼす影響について検討した（細川・幸喜・岡野・早川・堂山 2019）。階上テラス型園庭を有する2園と従来型の土の園庭を有する2園において園庭での子どもの遊びを観察して分析した結果、前者では「自然」「感覚遊び」「役割のあるごっこ遊び」が有意に少なく、「移動遊具」が多かった。階上テラス型園庭では土の園庭に比べて「自然環境が少ない」「遊びの拠点となる場がつくりにくい」「環境を構成する上で移動遊具が多用される」といった特徴が明らかになり、これらが子どもの遊びに影響を及ぼしていると考えられた。

こうした従来とは異なる特徴を持った階上テラス型園庭という環境での保育においては、それに応じた配慮や保育内容の工夫などが存在するものと考えられる。本研究では、園環境の管理者である園長へのインタビューを通して、階上テラス型園庭をどのように使用しているか、また限定的な環境であるが故の制約や管理運営上の課題はどういったものか、その実態を明らかにし、階上テラス型園庭という環境が保育に及ぼす影響について検討することを目的とする。

II．方法

（1）対象

関東圏にあるX市内の土の園庭がなく代替として階上にテラスのみを有する保育所（接地性のない園）5園（A～E園とする）の園長、または園長と主任保育士を対象とした。いずれも認可保育園である。各園の概要は Table 1 に示した。

A園は定員90名でビルの3階に、B園は定員120名でビルの4～5階に、C園は定員100名でビルの3階にある。この3園の上階はいずれも住居となっている。D園・E園は建物の最上階にあって階上にテラスを有している。

（2）手続き

2015（平成27）年10月から2016（平成28）年2月にかけて、上記対象に半構造化面接を実施した。インタビューの内容は、「階上テラス型園庭の使い方」、「使用する上での決まり」、「良さと困難さ」、

Table 1． 調査協力園の概要

	A園	B園	C園	D園	E園
場所	複合ビルの3階、上階は住居	複合ビルの4・5階、テラスは5階	複合ビルの3階、上階は住居	複合ビルの6階、テラスは階上	複合ビルの3階、テラスは階上
定員	90名	120名	100名	54名	60人
テラスの固定遊具等	砂場	大型遊具1、砂場、ウッドデッキ	大型遊具1、砂場、ウッドデッキ、植栽（樹木）	畑、ウッドデッキ、トイレ	畑、植栽（樹木）
テラスの移動遊具等	プランター、（短縄、長縄、三輪車、竹馬、ままごとセット、チョーク）	タイヤ、鉄棒、ままごとセット	竹馬、車、ままごとセット、ござ、プランター、シャベル	プランター、（長縄）	プランター
調査期間	平成27年11月	平成27年11月	平成27年12月	平成28年2月	平成28年2月

※（）内は、常にテラスに出してある訳ではなく、必要に応じて保育者が出している。
※ いずれの園も、夏季には組み立て式のプールを設置する。

「改造の有無」、「保育の組み立てへの影響や配慮」、「保育上の配慮」等である。インタビューは研究者2名により実施し、対象の同意を得た上で録音した。また、これらの対象には研究の主旨、プライバシーへの配慮等を書面にて説明し、研究協力への承諾を得た。

Ⅲ．結果と考察

（1）階上テラス型園庭の使い方（Table 2）

D園以外の4園については通常と同じ園庭としての使い方をしていた。A園は乳児と幼児で活動の時間を区切って（10時30分前後）テラスを使用している。B園は9時30分までは自由にテラスに出て遊んでいいことになっており、C園は3歳児以上が一定時間まで自由に遊んでいいことになっていた。E園については、テラスを屋外遊戯スペースという位置づけで用いていた。D園はテラスに畑を設置しており、夏季のプール活動以外では、乳児が遊ぶことがあったり、子育て支援の際に用いていたりする。あまり広くないことと、保育室から階段を経て階上に出る必要があり、子どもたちだけで自由に行き来することが困難であることから、畑等のスペースとして用いていた。

登園してからテラスで自由に遊べる年齢を3歳以上とする、乳児と幼児でテラスの使用時間帯を分けるなど園により異なった使い方をしていたが、これは各園の保育の方法の違いと、乳児と幼児の遊び方が異なるために従来の土の園庭を持つ園でも配慮していることと共通している側面でもある。また、お祭りなど行事の際にテラスを用いている園が多かった。

（2）階上テラス型園庭を使用する上でのきまり（Table 3）

階上テラスを使用するにあたってのきまりについて聞いた。園庭として使用しているA、B、C、E園においては、テラスにあるフェンスを超えてしまう恐れのある遊具や遊び方についての制限があった。どの園もボールは使用しないきまり、もしくはA園は使う時はボールが弾まないように空気を少し抜いておくといった配慮を設けていた。また、ジャンプなど高さのあることはできない、へりに登ったり、へりにある植栽から飛び降りたりすることを禁止するなど制限があった。B園とC園は開園当初から、A園は開園後に購入した砂場があるが、「砂場の砂は外に出さない」（B園）、「砂場を掘って底が出たときには大事にしてね」（C園）といった約束をしていた。D園ではラバー（床面）の継ぎ目をほじらないといった約束もあった。

移動遊具については自転車などの乗用する遊具は狭くて危ないことを理由に用いていない（A園、B園、C園）。夏場は人工芝が熱くなるので靴を履く（B園）などがあった。

Table 2． テラスの使い方

A園	B園	C園	D園	E園
・テラスに面した保育室では登園後にテラスに自由に出て遊ぶこともできる。 ・時間で分けて使用している（乳児：登園～10時30分、幼児：それ以降）。 ・4・5歳児はテラスを使用することが多い。 ・2歳児は砂場をよく使っている。	・通常の園庭と同様の使用方法で、登園したらテラスで自由に遊ぶ。	・3歳以上児は登園したらテラスで遊ぶ。	・畑が設置されている。 ・夏季は組み立て式のプールを設置する。 ・子育て支援の際に使用している。 ・テラスで乳児が遊ぶことがある。 ・テラスで給食を食べることがある。	・散歩に行かないときには自由に遊べる。 ・夏季はプールを4つ出して遊ぶ。

（3）階上テラス型園庭の良さと困難さ（Table 4）

階上にあるテラス型園庭という環境について難しさがあるか聞いたところ、3園は「ない」との回答で、2園は「どちらともいえない」との回答であった。E園は、「土の園庭には土の良さがある」とは思っているものの、保育をする上での困難さは特に感じておらず、テラスのような広いスペースがあることを肯定的に捉えていた。

まず階上テラス型園庭の良さについては、防犯面において安全を確保しやすいことが挙げられた。また、砂場の管理について猫などの動物が入ってこないため忌避剤など薬品を使う必要がないことも挙げられた。床面の素材がクッション材であるC園では、歩き始めの子どもに適しているとしており、E園でも床素材が柔らかいので怪我がないとのことであった。ただ、A園は床材がコンクリートであり、安全管理上の問題からラバーを後から張り付けたということであった。水捌けの良さについてもいくつかの園（D園、E園）で言及されていた。D園ではプール使用時の排水など水捌けが良いことを挙げていた。一方、A園は水捌けが悪く、雨が降った後は子どもが滑って転ぶことがあるということで各園の建築の様態やテラス床面の材質によって異なるようであった。

テラス型園庭の困難さについて「ある」と回答した園は無かったが、インタビューではどの園でも園内環境のみでは子どもが「自然物」とかかわ

Table 3． テラス使用の際のきまり

ボール	・ボールを蹴り上げないと約束している（A園） ・ボールの空気を少し減らす（A園） ・ボール遊びはしない（B園、D園）
高さ	・へりに上らない（B園） ・植栽からのジャンプ禁止（C園） ・物を投げない（E園） ・フェンスを越えて水をかき出さない（E園）
砂場	・砂場の砂は外に出さない（B園） ・砂場を掘って底が出たときは大事にしてね（C園）
遊具	・大型遊具を使用する際は靴を履く（B園） ・自転車こぎはダメ（C園）
その他	・床面のラバーのつなぎ目をほじらない（D園） ・予想外のことをしないか気を張る（B園）

Table 4． テラス型園庭の使用上の良さと難しさ、環境の設定や改造など

良さ	・床面にチョークで絵が描ける（A園） ・動物が入らないので砂場を安全に管理できる（C園） ・床材のクッション性が強く、歩き始めの子どもには良い（C園） ・子どもに怪我がない（E園） ・子どもが汚れない（E園） ・水捌けが良い（D園、E園）	
難しさ	・幼児ではもっと広さがほしい（A園） ・集団遊びにおいて、クラス全体で動くことが難しい（C園） ・プランターで栽培などしているが、自然が少なく昆虫がほとんどいない（A園、B園、C園） ・プランターで草花や野菜を植えているが、うまく育たないことがある（B園） ・無機質な印象（C園）	
環境の設定や改造	物理的環境	・フェンスを高くした、床面を貼る（A園） ・砂場の設置（A園） ・庇の設置（B園）
	自然環境	・塀にそって植物を植えた（C園）
	移動遊具の設置	・鉄棒を置く（B園） ・巧技台や段ボールなど変化のある場をつくる（C園）

る経験が乏しいということが聞かれ、各園でテラスに設置したプランターで栽培を行ったり、園外活動で子どもが自然にふれる機会を設けたりするなど対処を試みていた。

野菜や花などの「植物」はどの園でもプランターを用いて栽培しているが、A園、B園においては「プランターの置ける数に限りがある」ことや「土の入れ替えの必要性」など管理上の課題も述べられた。また植物の生育については、建物の屋上がテラスとなっているD園では「よく育つ」とのことであったが、B園では「乾燥しているため、よく育つ植物と植えてもすぐに枯れてしまう植物とがあり、なかなか思い通りにはいかない」とのことであった。C園では周囲に塀があるために無機質な印象であることが挙げられていた。なおC園は、塀の周囲に植物を植えたところ、10年ほどの時間が経って植物が垂れ下がるまでになったということであった。

子どもが自由に「土」をいじれる機会はほとんどの園でなかったが、D園ではプランターに土を入れて子どもが土いじりをする機会を設けていた。

A園、B園、C園は、テラス型園庭には「昆虫」がほとんどいないことを挙げ、身近に虫がいないことから子どもが虫を知らず、芋掘りに行って虫がいると過剰に反応している姿があることが述べられた（B園）。

B園では「秋になると自然に木の葉が落ちる」ことや「木陰がない」など自然物がないことによる子どもの経験への影響についても述べられた。さらに、散歩に連れて行っても目的もなく咲いていたタンポポを全部摘んでしまうなど、子どもたちに経験がないことから自然との関わり方を知らないという話も聞かれ、自然がない部分をどのように保障するかが課題であるということであった。

（4）テラスの環境の設定、変更、改造など（Table 4）

テラスの環境設定や変更、改造の有無について聞いたところ、物理的な面では「フェンスを高くした」「床面に柔らかい素材を貼った」（A園）、「庇をつけた」（B園）などがあった。また、変化のある環境を構成するために、鉄棒やタイヤなど（B園）や、巧技台、ござ、段ボールを置き高さが生まれるようにする（C園）など移動できる遊具の設置が行われていた。自然との関わりについては、E園は階上のテラスに建築当初から畑が設

Table 5． 外遊びや散歩について

外遊びや散歩のしかた	・晴れた日は散歩に行くようにしている（4歳児は週に2～3回）（A園） ・子どもにさせたい経験を考慮し、行き先の公園を選んでいる（B園） ・散歩には週に2～3回行っている（C園） ・日常的に（毎日）散歩に行く（D園） ・午前中に2時間たっぷり園外活動をしている（D園） ・近隣の土の園庭がある姉妹園に行きどろんこ遊びをしている（D園） ・近くに大きな公園があり、図鑑や虫眼鏡、砂遊びの道具をもって行く（E園）

Table 6． 保育上・管理運営上の配慮と課題

保育上の配慮と課題	・自然がない分、大人が意識的に自然物との出会いをつくっていく必要がある（B園） ・散歩にいってもハエも知らず、自然との関わり方も知らない（B園） ・職員の共通認識の持ち方（B園） ・4・5歳児の縦割りのグループで行き、経験を伝える体験をするなどもねらいにしている（C園） ・保育計画に公園で経験させたい内容を記載する（C園）
管理運営上の配慮と課題	・上階からの落下物（A園、C園） ・子どもの声についてのトラブル（A園） ・防犯面では安全、安心感がある（A園） ・公園も混んでいる。また、小学生などの大きい子どもも遊んでおり気を使う（A園） ・人工芝が夏暑く、また砂場の砂の入れ替えが大変である（B園） ・ウッドデッキが固く、とげがささると深い（C園） ・戸外のスペースとして使用している（D園）

けられており、野菜等を植えて収穫の体験をしていた。

（5）外遊びや散歩との関係と保育の組み立て（Table 5）

全ての園で意識的に散歩に行くようにしており、いつも利用する公園がいくつかあった。散歩の頻度は、A園とC園は週に2～3回程度であり、D園では園庭のある姉妹園の園庭で週2回程度活動をしていた。また全ての園で近隣に1つないし複数の公園があった。散歩への取り組み方は園によってそれぞれ異なり、E園は図鑑や虫眼鏡、砂遊びの道具をもって行き、C園では園に自然環境がないので自然を味わうために散歩に行くとのことであった。いずれの園もテラス型園庭では不足する経験や、また園の保育でさせたい経験を考慮して、意識的に散歩を保育の中に位置づけて考えていることが考えられた。

（6）保育の組み立て、保育上の配慮、管理運営上の配慮（Table 6）

階上が住居等になっている園では、階上からの落下物への対策（C園）や、音への苦情対応（A園）など、階上との関係についての配慮があった。環境整備という点からは、「人工芝が経年変化で詰まってきた」「砂場の砂の入れ替えが困難である」「ウッドデッキが堅いのでとげがささると深い」といったことなどが挙げられた。

カリキュラムとの関係では、C園はどの公園でどういった遊びをするか「場」と「遊び」を記載するようにしており、カリキュラムの中で公園での遊びを保育内容として位置付けていた。また4・5歳の縦割りで2グループに分けて散歩に行き、新しい場所は5歳児が4歳児を案内して遊びや場の使い方を引き継ぐようにするなど散歩自体にもねらいを持たせて保育を組み立てていた。B園では、子どもにさせたい経験を踏まえて散歩先の公園を選んでおり、園にないものを散歩の道中や公園での遊びで体験させるように配慮するなど、保育のねらいとも照らし合わせていた。

また遊びへの制限だけでなく、テラス型園庭では子どもの自然との関わりが乏しい状況をどのように補い、保障していくのかも問題となってくる。従来型の接地性のある園の土の園庭では大人がさほど意識しなくても自然物は存在しているが、テラス型の園庭の場合は大人が意図的に子どもと自然物とが出会う機会をつくっていかなければならず、B園では「どのように保育者の中にそうした意識をつくっていくのか」が課題であるということも聞かれた。さらに、子どもたちへの影響として「テラスにある物が常に同じで遊びが広がらない」「子どもが興味を持てるものが少なく、遊びを探しきれない」ことも述べられていた。

Ⅳ．総合的考察

本研究の結果、階上テラス型園庭の使用方法の実態と管理運営上の課題について一定程度明らかにすることができたものと考える。テラス型園庭の特徴として、プラスの面としては不審者や危険物に対する注意を払わなくてよいなど安全面におけるメリットがいくつか挙げられた。しかしながら各園で述べられている課題にも多くの共通点が見いだされた。

特に「自然」に関することについて子どもに経験させたいがさせられないと感じていることが多くあり、園ごとに様々な配慮や工夫をしていることがインタビューから窺われた（Table 4～6）。いずれの園も子どもの自然体験を補うために公園への散歩を保育内容に盛り込んでいた。しかしながら、公園は公共の場という性格を帯びているため特定の園が占有して使用することはできず、やはり、そこでの子どもの経験も限定的なものにとどまらざるを得ないであろう。実際、筆者が保育現場に勤めていたときに子どもが公園の花壇に咲いていた花を摘んだことによって園にクレームがきたということもあった。

また、階下に物を落とさないという配慮から、ボールを用いないなど子どもたちの遊具を使用した遊びや活動に制約が課せられていることも明らかになった。先のⅢ－（2）でも述べたように、テラス型園庭は広さや、落下物などへ安全面への配慮から自転車などの移動遊具やボールのような

小型遊具は使えないか使えるとしても制限が設けられている。これらを公園に持参したとしても同様の状況でやってくる他の園や地域の親子で混みあっており、使用には配慮が必要である。困難さを明確に「ある」とした園はなかったものの自然との関わり同様に遊具を用いた遊びの展開にも苦慮している様子が窺われた。

そして調査で訪れた各園では、保育目標や子どもにさせたい経験から様々に工夫したり、カリキュラム上の配慮を検討したりするなど試行錯誤している様子が伺えた。一方で、園によってもテラス型の園庭を保育上どのように捉え、保育に位置付けているかは異なっており、同じテラス型の園庭でもあっても一様ではなく、園それぞれに扱いが異なっていることも明らかとなった。

いずれにしても、テラス型園庭には土の園庭とは異なる特徴があると考えられる。早川（2017）は、平成25年に園庭（屋外遊技場）の設置認可基準が変更されたＸ市の保育所の保育士を対象に園庭について意識調査をした結果をもとに、園庭はいかにあるべきかという問いを投げかけている。その中で「子どもが環境に働きかけ、環境との相互作用を通して」発達していくためには、何よりも「環境が応答的であること」が大切であろうとしている。「応答的な環境」として真っ先に思い浮かぶのが、草花をちぎって絞ってみたり、土を掘り返して昆虫を探してみたりといった自然環境との関わりであろう。身近な動植物との関わりを通じて子どもたちは多くを学んでいく。またそれに加えて「変化に富む環境」であるということも子どもの好奇心・探求心を刺激する上で不可欠なものであると考える。仙田（2009）は、子どもの「あそび環境」を研究する上で、「あそび空間」という概念を導入し、①自然スペース、②オープンスペース、③道スペース、④アナーキースペース、⑤アジトスペース、⑥遊具スペースという６つを設定した。このうち、自然スペースについては「そこに自然の生命と変化があることが重要」であり、子どもたちは「自然のあそびを通して生きものの誕生や死に遭遇し、生命というものを知ることさえできる」と述べ、６つのあそび空間の中でも最も基本的で重要なものだとしている。自然物の豊富な園庭では季節の移り変わりとともに園庭環境も自然と変化していくが、テラス型園庭ではプランターなどを用いて工夫をしたとしてもどうしても限度が生じてしまう。またⅢ－（４）で述べたように環境に変化をつけるため可動性のある遊具を導入したとしてもⅢ－（６）のＢ園の悩みのようにいずれはそれがマンネリ化してしまうことは避けられない。そうしたテラス型園庭の宿命ともいえる環境の応答性や変化の乏しさに対していかに工夫をして変化を与えていくかといったことも課題として想定されよう。今後はそうしたテラス型園庭の特徴を踏まえ、子どもの豊かな遊びを生み出す環境としてテラス型園庭のあり方や保育のしかたを考えていく必要があるだろう。

先にテラス型園庭の保育における位置付けは一様でないと述べたが、各園でテラス型園庭を活用した保育内容を検討するにあたって参考にすべき点として園を利用する保護者のニーズが挙げられる。杉原・斎尾・長谷（2007）は、東京都における保育所利用者の意識として、「保護者は、保育所を選択する際には選択の余地がなく、保育所を利用してから初めて子どもの生活環境を認識するようになり、保育所を選択する際には、子どもの環境について十分に考慮できる状況にはない」と述べている。東京に限らず、待機児童の多い都市部においてはこの傾向は顕著であると考えられる。利用する保護者のニーズの実態を明らかにすることは、どのようなカリキュラム・保育内容が妥当であるのかといったことを考える上でも有用であると考えられる。これはテラス型園庭に限ったことではないが、その活用や運用に関するアイデアや子どもの経験を補うための方策を保護者と共に知恵を出し合っていくことが重要であると考える。それによって園環境やそうした限定的な環境における保育に対する保護者の理解を促し、本来的には家庭生活を補完することが保育所の役割ではあるが、逆に園で子どもが経験できないことを家庭において補っていこうとする意識が芽生え、家庭における子育ての在り方を再考し、園と家庭とが互いの不足を補い合うような関係性を構築してい

くきっかけにもなるであろう。

最後に、乳幼児期に自然環境との関わりが乏しい状況や遊びや活動に制限が課せられた環境下での保育が児童期以降の育ちにどういった影響を及ぼすのか現時点では未だ明確なデータはなく、本研究を通してこうした環境で育つ子どもたちへの追跡調査を実施する必要性が感じられた。規制緩和によって保育環境が大きく変化していく中で子どもの育ちに何らかの弊害が生じてくるようであれば、それらを明らかにし、補っていくような取り組みも社会全体で考えていくことが必要となってくるであろう。子どもにとってのふさわしい育ちが得られる環境について10年先、20年先を見据えつつ検討を重ね、今後も子どもの最善の利益を実現するための保育の在り方を模索していきたい。

文献一覧

石倉卓子（2012）幼児の育ちに必要な園庭環境の検討―表現行為を可能にする自然財と道具の関係性―．保育学研究，50（3），18-28.

小池孝子・近藤ふみ・定行まり子（2015）保育施設の物理的環境指標に関する考察―全国認可保育所の施設環境実態調査を通して―．日本建築学会技術報告集，21（48），759-764.

小池孝子・定行まり子（2006）東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究．日本建築学会計画系論文集，605，47-53.

小池孝子・定行まり子（2008）都市部における保育施設の屋外保育環境について：東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究 その２．日本建築学会計画系論文集，73（628），1197-1204.

定行まり子・小池孝子（2007）保育施設における外遊びの環境に関する研究―園庭や公園での外遊びを通して見た屋外保育環境―．日本建築学会大会学術講演梗概集（九州），135-136.

定行まり子（2014）保育環境のデザイン．全国社会福祉協議会.

椎野亜紀夫（2007）保育施設による都市公園の選択的利用に関する事例研究．ランドスケープ研究，70（5），637-642.

杉原賢一・齋尾直子・長谷夏哉（2007）都市において多様化する保育所の運営実態と利用者の選択意識に関する研究（その２）―東京都における保育所利用者の選択意識と保育環境の課題―．日本建築学会大会学術講演梗概集（九州），133-134.

仙田満（2009）こどものあそび環境．鹿島出版会

田中稲子・三輪律江・松橋圭子・谷口新（2009）横浜市における駅前保育施設の園外活動の場としての街区公園利用とその評価に関する研究．日本都市計画学会都市計画論文集，44（3），373-378.

谷口新・三輪律江・松橋圭子・田中稲子（2008）保育施設の園庭の有無と園外活動としての公園利用に関する考察．日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），197-198.

野中壽子（2014）外遊びの保育環境に関する研究．名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，22，75-81.

早川悦子（2017）保育所における園庭が果たす役割―保育士への調査から―．鶴見大学紀要，第３部，保育・歯科衛生編，54，73-78.

細川かおり・幸喜健・岡野雅子・早川悦子・堂山亞紀（2019）接地性のないテラス型園庭という環境が子どもの遊びに及ぼす影響．千葉大学教育学部研究紀要，67，191-197

松橋圭子・三輪律江・谷口新・田中稲子・大原一興・藤岡泰寛（2008）保育施設における園外活動の実態からみた地域資源の使われ方について―横浜市を対象としたアンケート調査より―．日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），195-196.

三輪律江・田中稲子・松橋圭子・谷口新・田村明弘（2008）保育施設の「屋外遊戯場」としての公園の代替利用に関する研究：横浜市における保育施設を対象としたアンケート調査より．日本都市計画学会都市計画論文集，43（3），907-912.

謝辞

ご多用の中、本研究にご協力くださいました保

育所の園長ならびに主任保育士の先生方皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費助成事業を受けたものである。研究課題名「園庭がない保育所における保育に関する研究：待機児童解消と子どもの発達保障の両立」（研究代表者：細川かおり，研究種目：基盤研究（C）（一般），研究期間：2015-2017年度，科研費研究課題番号：15K01769）

要旨

近年都市部では待機児童解消という喫緊の課題から、規制緩和を背景に保育施設の量的拡充が図られている。本研究ではそうした背景の下に開設された、接地性があり土の園庭をもつ従来型の保育所とは異なる、接地性がなく階上にテラス型の園庭をもつ保育所という新たな形態の保育環境について、園長へのインタビューを通して実態を把握し、その課題を検討した。その結果、階上テラス型園庭を持つ保育所では複合施設ならではの使用上のきまりが設けられていることや子どもの自然体験に関する課題意識が窺えることなど共通したいくつかの特徴がみられた。こうした特徴を踏まえてカリキュラムや保育内容を検討していく必要があるものと考える。

（2020年 9 月11日受稿）